

ノイエスだより

ノイエス朝日(朝日印刷工業株式会社)

群馬県前橋市元総社町七三ー五

TEL 027・2555・3434

FAX 027・2555・3435

http://www.neues-asahi.jp

映画というものを何歳の頃から見始めたのか記憶は定かでないものの同世代の人々が経験している学校での集団での鑑賞会だったであろう。当時、桐生には映画館が五館あり、小学校の頃から何故かよく行っていました。特殊ホラー映画「マタンゴ」(一九六三)や森繁久弥の社長シリーズ、植木等、クレージーキャッツの喜劇映画、加山雄三の若大将シリーズ、「モスラ対ゴジラ」などの怪獣映画。東映アニメ映画「安寿と厨子王丸」、舟木一夫、和泉雅子の「絶唱」、レナード・ホワイティングとオリヴィア・ハッセーの「ロミオとジュリエット」など。社会人になり少しの間は映画からは離れていました。

しかし、子供の頃からの映像好きは変わることなく社会人になっても映画館に行ったり、ビデオ、DVDで見たり…と続いています。日本映画の名作と言われる作品との出会いは、当時はレンタルというシステムはなかったので見逃している作品の多いのも確かです。以前、映画監督のトークと作品の上映という企画に関わったことがあり、目の前に映画監督が現れると特別な世界の人という感じで厳しい目つきと優しい目つきを両方とも恐れてしまう自分がいました。

同じ人間であるはずなのに何か見すかされているような錯覚に陥ります。人一倍好奇心も強いので知りたい気持ちもあるのですが、近寄り難い感じがずっとしていました。

一九八七年に出版された小栗康平監督の「哀切と痛切」を久しぶりに開き再読してみました。「映画のあらゆるカットは暗闇に守られている」「映画は時間の再現という自己矛盾を拡大し続けてきた」「私は丸みをもって滑っていく時間のほうが好きだ」「それは自分の身体の色」そんなフレーズがしばらく気になり続けています。考えもしなかった身体感覚の言葉です。自分の生き方さえ現実と非現実の間を行き来するような時があります。映像の中に現実を見つけ、非現実の中に夢を追いかけてくれるような魅力にとりつかれてしまいます。

十一月十四日から小栗康平監督・脚本の「FOUJITA」が全国ロードショーになります。

藤田嗣治は、戦前よりフランスのパリで活躍、「乳白色の肌」と呼ばれた裸婦は当時の西洋画壇で絶賛を浴び、エコール・ド・パリの寵児に

して社交界の人気者となり、その後、戦時の日本で戦争画を描いて日本美術界の重鎮に上りつめていきました。藤田嗣治に関しては、藤田本人が「腕一本」「随筆集 地を泳ぐ」などの本を書いているので機会があったら図書館で借りて読んでみて下さい。所々に散りばめられたカットの線が美しく印象的です。また、東京国立近代美術館において十二月十三日まで「MOMATコレクション」に藤田作品二十六点が展示されています。

映画「FOUJITA」は、当時のパリでの藤田のアトリエや、華やかなモンパルナスで開かれたフジタナイトと称した仮装舞踏会の雰囲気誘い込んでくれます。そして、お調子者というフーフーという愛称で呼ばれていた藤田の実存が見えてきます。

一転して日本に戻り、戦意高揚のための国民総力決戦美術展の会場に展示された「アツツ島玉砕」。その会場での藤田の心の動きが微妙に感じられました。

小栗康平監督の映像の美しさ、人物の動きや空気感や会話に流れる緊張感など観るものに想像の遊びを持たせてくれ、なおかつ暗闇の中で安心して身を任せられる場を体感させてくれます。是非、十一月十四日からの上映を一度と言わず何度かご覧になっていただければと思います。前売券(一四〇〇円)も好評発売中です。

お友達、ご家族で是非映画館に足をはこんで下さい。

(武藤)

「FOUJITA」前売券

展覧会会期中にご来廊・お問合わせ下さい。

電話 027・2555・3434 (ノイエス)

ノイエス朝日〈展覧会〉のご案内

第9回 キルトハウス ヒサ

パッチワーク教室作品展

会期 十一月五日(木)～八日(日)

午前十時～午後六時(最終日は午後四時半)

会場 ノイエス朝日 スペース1・2

群馬作家展 〈企画〉

会期 十一月十四日(土)～二十二日(日)

午前十時～午後五時

会場 ノイエス朝日 スペース1・2

展覧会予告

二〇一六年一月五日(火)～十七日(日)

四ツ井健(友禅染)×藍田愛郎(江戸小紋)

「染・彩々展」

今回は友禅染作家の四ツ井健氏より

伝統と創作について

「金沢で友禅の仕事をしています。」といえは「加賀友禅ですね。」とよく言われます。私自身、加賀友禅という言葉あまり意識せずに仕事をしています。私は加賀友禅とは一時代に流行した様式と考えております。現代に生きる作家である以上ファッションである着物は常に今の時代に合ったものを創作していかなくてはいけないと考えています。

日本人は、さまざまな様式美をこれまで多くの先達によって創作されてきました。私達はそれも勉強しながら自然を愛し勉強し、着物という形の中で開花させる様式美を創作しなければなら

いと考えます。

出来上がった着物は、女性が着装することで完成します。彼女はその装いで、何処で誰とどんな話をするのでしょうか。

そんな素敵な空間づくりのお手伝いが出来ればと思

い日々仕事をしております。 四ツ井 健



友禅染帯「黒百合文様」